はじめての万葉集

日本に現存する最古の和歌集「万葉集」をわかりやすくご紹介します

vol. 137

難波門を　漕ぎ出て見れば
神さぶる　生駒高嶺に
雲そたなびく

大田部三成（巻二十・四三八〇番歌）

訳 難波の港を漕ぎ出してみると、神々しい生駒の高嶺に雲がたなびいている。

防人が見た生駒山

本歌を含む四三七三～四三八三番歌の十一首は、四三八三番歌の左注によると、下野国（現在の栃木県）の防人の詠んだものとして収められています。元々、進上された歌は十八首でしたが、出来の良くないものは収められなかったと記されています。また、本歌の左注によると、作者は、梁田郡（現在の栃木県足利市）の人、大田部三成です。すなわち、三成が防人として西海道（九州）に向かう途中で詠んだことが分かります。

防人とは、古代に辺境の防備についた兵のことです。天智二（六六三）年八月、百済救援戦争（白村江の戦い）で唐・新羅の連合軍に敗れた日本には、大陸からの派兵に備える必要が生じていました。そのため、九州北部沿岸の防備が、以前よりも重視されるようになったのです。

防人は、本歌のように東国から徴発されることが多く、その往還も負担の大きいものでした。難波は梁田郡から大宰府までのおおよそ中間点にあたります。「難波門」は難波の門（入口）と考えられますが、「門」を「津」の誤りとする説もあります。

難波から大宰府までは、瀬戸内海を船で通過することが通常でした。そのため、難波からは比較的安全な内海を通り、九州上陸後は自らの足で歩く距離もあと少しとなります。また、難波までの食料は防人本人の負担でしたが、以降は公用として支給されました。

難波から出航して一息ついた際に、故郷のある東を向くと、生駒山が目に入ってきます。生駒山を神々しいと詠んでいますが、どのような想いで見たのでしょうか。

（本文　万葉文化館　中本和）

万葉文化館イベント情報

◆特別展 天翔る飛鳥 烏頭尾精の世界

開催中～9月15日(祝)

明日香村出身の画家で、満93歳になる烏頭尾精さん。本展では、16年の歳月をかけて奈良や京都の古都の風景を描いた「古都シリーズ」を一挙に公開します。

烏頭尾精《夏蒼天》2023年 個人蔵

※国内の小・中学生、高校生、18歳未満の人は無料。その他割引など、詳しくは当館HPをご覧ください。

◆万葉の日記念講座 無料

9月15日(祝)14時～17時

[定員]150人(先着・申込不要)
※オンライン視聴は要申込(定員なし)

●文学研究からみた「飛鳥池工房遺跡」の意義

[講師]井上さやか(当館企画・研究係長)

●国宝・重要文化財に指定された『万葉集』の写本

[講師]榎戸渉吾(当館研究員)

●世界記憶遺産『御堂関白記』―文化の庇護者としての藤原道長―

[講師]中本和(当館主任研究員)

◆万葉集をよむ 無料

9月10日(水)14時～15時30分

「秋の雑歌(6)」
(巻8・1574～1591番歌)

[講師]榎戸渉吾(当館研究員)
[定員]150人(先着・申込不要)
※オンライン視聴は要申込
(定員なし)

◆にぎわいフェスタ万葉 秋

9月15日(祝)～11月24日(振休)

※詳しくは当館HPをご覧ください。

奈良県立 万葉文化館
☎0744-54-1850
www.manyo.jp